

アート・ドキュメンテーション の国際化

会長 高山正也

創立15周年を迎えたアート・ドキュメンテーション研究会の今年のプログラムの目玉の一つがさる8月6・7日に神戸で開催された国際シンポジウムであった。関係された会員各位の一方ならぬご努力に加え、協賛・支援をいただいた諸団体・機関のご助力も得て、成功のうちに幕を閉じる事が出来たのはご同慶の至りであり、これら全ての方々と機関・組織に心からのお礼を申し上げたい。

15周年目にして本研究会の執行部にとっては悲願ともいえるべき国際的な企画によりやく着手することが出来たことは、速い遅いは別として本研究会もそれなりに力をつけてきた証拠でもあろう。今回はそのテーマ「東アジアにおける美術・文化財情報のネットワーク化を考える」に端的に示されたように、国際とはいいつつも、地理的には日中韓の三国に限定されていたし、内容もネットワーク化の前提である情報化問題に主眼が置かれた。その結果、論点は絞られ、シンポジウムとしては成功のもとになったが、これらは日本側の発表者であった水谷長志氏の発表にある、取り組むべき課題のほんの一部に過ぎない。残された諸課題は本研究会にとって今後の課題となる。

そもそも情報に、そしてアートの世界には国境はない。国境を越えて、グローバルに広がるアートの作品は、全世界の人たちにとって国籍や居住地の如何を越えて享受する人類共有の遺産 (heritage) である。そのためには作品の収集、活用、保存とともに、それら作品の記述とその標準化は不可欠であり、その情報の共有もまた不可欠である。

しかしこれらの仕事は日本のみならず、近隣諸国においても、またその他の多くの国においても、まだ未着手か、ようやく緒に就いたばかりの感が否めない。

このような課題達成のためには、本研究会会員の方々の日常の地道な仕事の進展だけに依存するだけではなく、更なる効率化や基盤の強化のために、財政、行政、教育等のアート・ドキュメンテーションの環境を醸成する各方面での改革も必要となる。

これらの諸課題はアート・ドキュメンテーション研究会にとっても、15周年を終えて、次の20周年・25周年へ向けての取り組むべき課題であろう。そのために会勢の拡大と研究活動の活発化の起爆剤として、今回の国際シンポジウムを利用させていただくことも今次の国際シンポジウムに関わられ、努力された各位に報いる道であると確信している。会員各位の一層のご支援もあわせてよろしくお願い致します。

(たかやま まさや 慶應義塾大学文学部) 

アート・ドキュメンテーション研究会15周年記念行事 第3回アート・ドキュメンテーション研究フォーラム 国際シンポジウム「東アジアに おける美術・文化財情報のネッ トワーク化を考える」苦労話

国際シンポジウム実行委員長・幹事長 田窪直規

当誌の編集担当者から、15周年記念行事(国際シンポジウム)の開催経緯について、苦労話を交えて記すようにとの依頼を受けた。指定分量は1ページ半ということであった。少し長いなと思ったが、実際に記してみると、詳細部分を省略しても、3ページをゆうに超えた。ふりかえてみれば、準備に取り掛かって足掛け3年の間に、実にいろんなことがあったもんだと、しみじみ感じた。以下、いろいろあったことのうち、二つの苦労話に絞って、指定分量前後に収まるように気をつけつつ、述べて行きたい。

まず最初に、以下の記述を理解するのに最小限必要な、記念行事のデータを示す。

タイトル: 当記事のタイトルを参照されたし

日時: 2004年8月6日、7日

会場: 兵庫県立美術館ミュージアムホール
構成と発表者・パネリスト、司会者:

セッション1

東アジア美術の関係性と情報共有の必要性

発表者: 越智裕二郎氏

セッション2

東アジアにおける美術図書館の現状と相互協力の可能性

発表者・パネリスト: 水谷長志氏、朱賽虹氏、金達鎮氏
司会者: 波多野宏之氏

セッション3

東アジアにおける美術作品・文化財データベースの現状と相互協力の可能性

発表者・パネリスト: 田良島哲氏、王春氏、朱賽虹氏、孔達錫氏

司会者: 筆者

筆者は、1999年に、友人の崔錫斗氏(のついで、韓国のアート・ドキュメンテーションについて調査しており1)、2000年には、これまた友人の李常慶氏(のついで、中国のアート・ドキュメンテーションについて調査している2)。今回の記念行事は、この両氏の全面的な協力(多大な尽力)によって実現したものである。なお、当初、実行委員は、筆者のほか、幹事の高橋晴子氏、会場館の館長補佐で当会会員の越智氏で結成し、その後、人数を増やし、幹事全員が実行委員となった。

さて、これから、苦労話を記すわけであるが、様々な苦労話のネタのうち、ここでは、資金調達と、土壇場での発表者・パネリストとプログラムの変更について述べる。

記念行事は国際シンポジウムなので、多大な費用がかか